

「図画工作科の教科観」の転換に向けて

—初等教科教育法（図画工作）の取り組みを通して—

A study for diverting the values about Image of “Arts and Crafts”
Through the practice at primary education method “Arts and Crafts”

井ノ口 和子
Kazuko INOBUCHI

概要

本研究では、図画工作・美術科教育において大きな課題の一つとなっている「図画工作科の教科観（図工観）」の転換に着目した。本研究の目的は、質問紙調査への回答と記述内容の分析から、初等教科教育法（図画工作）の受講学生の「図工観」の変容について考察することである。その結果、以下のような結論を導いた。第一に、「作品中心の図工観」、「作品を作らせるための指導観」から子どもの「発想」や「造形活動の過程」を重視した「図工観・指導観」に変容した。第二に、教科の目標や評価規準についての理解を深め、「教科」としての位置付けを理解した。第三に、図画工作科を指導することへの不安は低下したが、子どもの造形の特徴や明確な指導法の理解が十分ではなく、実践的指導力への不安をもっている。学生に子どもの造形の特徴や具体的な指導法を十分に理解させるための実践が今後の課題である。

キーワード：図画工作科，図工観・指導観，初等教科教育法

Abstract

In this study, I focused on diversion about the image of “arts and crafts.” It is the most important and problem for the arts education. This study had aimed to make clear that the image of the “arts and crafts” and the image of the “guidance”, through the practices at primary school teacher course. As a result, firstly, the students changed themselves into the image of “arts and crafts” and “guidance”, that emphasized “children’s” and “children’s process of activities” from “making a work” and “guidance for making a works.” Secondly, students deepened their understanding of the goals and evaluation criteria of the “learning subjects,” they understood the position as “learning subjects”. Thirdly, though the anxiety about teaching “arts and crafts” has decreased, it is not sufficient understanding of the children’s formative activities and the clear teaching methods. They have anxiety about practical method of guidance and support. Practice for students to fully understand “characteristics of children’s forming and specific teaching methods” is an issue.

Keywords: arts and crafts, values about image of “arts and crafts”, the practices at primary school teacher course, learning subjects

1. はじめに

児童にとって、図画工作科は「好きな教科」の一つである¹。しかし、学校現場には教員の多くが図画工作科を指導することへの不安感や苦手意識をもっている現状がある。この現状は、三澤ら（2003）に示された

市の小学校教員を対象とした質問紙調査の結果と考察で明らかにされている。これらの苦手意識や指導への不安は現場の教員に限ったことではなく、教員を志す学生にも同様の傾向が指摘され、降籬や隅による先行研究において課題解決に向けての考察が行なわれている。降籬(2012)は「教師の抱えている教育観の問い直し」という言葉を用いて、教員の再教育の必要性を指摘している。さらに、降籬(2015)は児童・生徒・大学生への実態調査を実施し、この「苦手意識」を「図画工作及び美術教育の現場における現実的かつ深刻な問題」とし、「一般的な題材開発や指導法の探求よりもそれ以前にまず取り組むべき重要な課題」と述べている。隅(2015)は、20歳代と50歳代の現職教員を対象として聞き取り調査を実施し、両者の教科観の相違と教員養成の果たす役割について考察している。隅や降籬の考察に共通するのは、図工への「苦手意識」が指導への「苦手意識」に直結しているとする指摘である。

筆者は、これまで小学校現場での実践研究を重ねてきた。2016年には、二つの教員養成大学において現場教員として図画工作科の実態を講義する機会を得た。その講義に対する学生の振り返りシートへの記述の分析から、図画工作への「苦手意識」や「指導することへの不安」の背景には、「図画工作は作品(絵)をつくら(描か)せる」とする「教科観」(以降、図工観)、「上手な作品(絵)をつくら(描か)せるための指導」とする「指導観」が存在すると考察した(井ノ口, 2017)。その考察では、隅や降籬の指摘と同様に「教科観・指導観」の転換に向けた取り組みが必要であることを指摘した。

「図画工作は作品(絵)をつくら(描か)せる」とする教科観は、美術教育で「作品主義」と言われるものとはほぼ同意のものであると考えられる。竹内(1985)は、作品展覧会における作品のみで評価をすることを取り上げ、学校現場における「作品主義」と指摘している。栗田(2002)は、作品主義による評価観について「コンクールにかかわっての作品主義という形式化や結果試行の中に、本来というか最初の目的なり理念を離れて一つの結果に向かって自立化していく姿」と記している。その他にも、花篤(2000)や永守(2009)ら多くの研究者や実践者によって「作品主義」への批判的見解や作品主義からの脱却の必要性が述べられてきた。しかし、これらの批判、指摘から20年以上経った現在においても、「作品主義」にかかわる教科観の課題が解決されたとは言えない現状がある。

「作品主義」による指導を受けた児童が図画工作科に対する苦手意識をもち、その苦手意識をもったままの学生が教員となって子どもたちに向かい合うなら、美術教育の現場には負のサイクルしか生まれない。「図画工作=上手い作品(絵)をつくる(描く)」という教科観では、「つくら(描か)せる」ための指導」とする指導観が形成されるのは当然のことであろう。この「図工観・指導観」を断ち切るためには、現職教員の研究・研修の機会における「教科観の捉え直し」と、教員養成課程における「作品主義から脱却した図画工作観」の形成を図る取り組みを両輪とした、地道な実践を重ねる他に方法はない。

筆者はこの「図工観・指導観」の転換を美術教育の根本となる重要な課題であると考え、学校現場での図画工作科実践事例の分析を中心とした研究を進めてきた。本年度は、勤務大学での初等教員養成課程において担当する図画工作科関連の授業において、前述したような「図工観・指導観」の転換を意図した実践を行った。本学教育学部に在籍する学生の多くは埼玉県及び近隣の関東地方出身であり、学級担任の指導による図画工作の授業を受けてきている。初等教科教育法(図画工作)は小学校の教員免許状取得のための必修科目であるため、本授業を受講している学生は、小学校の教員として図画工作科を指導する立場になることを強く自覚していると考えられる。

昨今の教員養成課程における図画工作に関連する授業では、学習指導要領に沿って目標や内容、子どもの造形について教育内容が構成されると共に、特に教科教育法においては題材開発や学習指導案作成、模擬授業などを取り入れ、実践的な指導力を育成することを目指している。筆者は、小学校現場での図画工作科専科教員として実践してきた図画工作科の題材や児童の学習活動の様子や児童作品を写真や動画を教材として活用することで、図画工作科の学習活動での子どもの造形活動の実態や特徴の理解を促し、いわゆる「作品主義」の「図工観・指導観」の転換を図る授業実践を行ってきた。

2. 研究の目的と方法

小学校教員養成課程をおく本学教育学部では、免許必修科目として3年生を対象とした「初等教科教育法（図画工作）」全15回（1時間は90分）を設定している。本研究では、教員養成課程における「初等教科教育法（図画工作）」の受講生の「図工観・指導観」の変容とその内容について考察することを目的とする。

本学教育学部では、図画工作に関する科目としては、1年生対象の「初等図画工作1」（全15回）、「初等図画工作2」（全15回）を設定している。この「初等図画工作1・2」は演習形式であり、小学校図画工作の内容や技能について実技を中心に学習する。本研究で取り上げる「初等教科教育法（図画工作）1・2」を受講している3年生は、全員が1年次に「初等図画工作」を受講しており、本授業において図画工作科の目標・内容、指導法などを理論的に学び、実践的指導力を身につけることが求められている。

先行研究では、教員養成課程で学ぶ学生の多くは、図画工作に対する「苦手意識」や図画工作を指導することへの「不安感」をもっていることが明らかにされている。したがって、本学の小学校教員養成課程で学ぶ学生にも同様の傾向があることは容易に想像できる。この要因には、先述した「作品主義」に基づく「図工観」があると推察される。そこで、「初等教科教育法（図画工作）」の授業において、学生の「苦手意識」や「不安感」を少しでも軽減すること、すなわち「図工観・指導観」を転換させることを意図し、授業内容や方法を設定した。

全15回の授業終了後に、学生の「図工観・指導観」の変容について質問紙による調査を実施した。本研究では、この調査に対する回答と記述を分析し、学生の「図工観・指導観」の変容について考察する。分析・考察は、初等教科教育法（図画工作）の第15回目（最終回）終了後に実施した質問紙調査（表1）への回答と記述内容を分析し、「図工観・指導観」がどのように変容したのかを考察する。受講者は、1組59名、2組60名、計119名である。

表1 質問項目と選択肢

番号	質問内容と選択肢
1	この授業（15回）を受けて、図画工作科のイメージ（図工観）が変わりましたか 1 大きく変わった 2 少し変わった 3 変わらない ①どのように変わったのかを具体的に記入してください。 ②変わったのは主に講義のどの内容からでしたか 以下にあげた項目のうち当てはまるものを選び、その要因として大きなものから順に並べて記入してください。 1 講義内容 2 講義での写真や動画 3 毎回の振り返りシート 4 グループワークの題材設定と学習指導案作成、プレゼンテーション 5 プレゼンテーションに対するグループディスカッション 6 最終課題の作成 7 その他（ ）
2	学校現場に出てからの図画工作の指導に対する気持ちを一つ選び○をしてください 1 とても楽しみ 2 どちらかという楽しみ 3 どちらでもない 4 少し不安 5 とても不安 具体的に何が楽しみか（不安か）を記入してください
3	15回の講義でもっと聞きたかった、学びたかったことがあれば自由に記入してください（複数可）

3. 初等教科教育法（図画工作）（全15回）の概要と学生の図画工作科への意識の実態

本章では、本研究の前提として、分析・考察の対象とする初等教科教育法（図画工作）の授業概要と授業開始時（第一回）の学生の図画工作科への意識の実態について整理する。

3.1 授業の概要

表2は全15回の授業内容（シラバス）をまとめたものである。授業ごとにテーマ（課題）を設定し、筆者の図画工作科実践事例から児童の活動の様子・児童作品の写真や動画、資料等を資料として提示し、講義

を進めた。授業では、授業の目標・内容に関連するテーマについてグループディスカッションをさせ、全体でのシェアを行なった。授業終了時には「本時の学び」を自由記述させ毎回提出させた。回収後、授業者（筆者）がコメントを記入し次週に返却し、次回授業の導入時に前時の振り返りとして数名に発表させた。題材開発と指導案作成の課題として模擬授業を計画していたが、学生の実態、受講者数、教室環境などを考慮し、模擬授業は行わず、現行の図画工作科教科書を参考とした作品制作を含んだ題材開発と指導案作成を課題内容とし、グループごとのプレゼンテーションとした。

3.2 学生の図画工作，指導への意識の実態（第一回目授業）

授業開始時の学生の実態を把握するため、「指導への気持ち」についての意識を挙手により確認し（114名）、それぞれの回答理由を数名に指名し回答させた（表3-1, 2, 3）。

3.2.1 図工への「好き・嫌い」と苦手意識

「とても好き」，「好き」と回答したのが60.5%，「とても嫌い」，「嫌い」と回答したのは26.9%と図工に対しては概ね肯定的に捉えている。「好き」の理由は「絵を描いたり工作したりするのが好き」，「自由にできる」，「友だちと話しながらできて楽しかった」などであり、「嫌い」の理由は「苦手」，「不器用」，「褒められた記憶がない」などである。「好き」とする理由には、「造形活動が好き」に加え、自由に活動できることや友だちとの関わりなど学習活動に関する内容が多い。一方、「嫌い」とする理由には造形に対する苦手意識や技能に関する内容、指導者からの評価などがあげられた。

苦手意識については、「ある」，「少しある」が62.2%，「ない」，「あまりない」が21.0%と苦手意識をもつ学生の割合が高くなっている。このことから、「図工は好きだが苦手である」という意識があることがわかる。

3.2.2 図工を指導することへの意識

「とても楽しみ」，「楽しみ」が15.1%，「とても不安」，「不安」が73.9%と、「不安」と回答している学生の割合が「楽しみ」と回答している学生より非常に高い。「楽しみ」の理由は「子どもたちと一緒に楽しみたい」，「どんな作品をつくるのかワクワクする」などであり、「不安」の理由は「絵を描かせる指導がわからない」，「そもそも自分ができないことを指導できるか不安」，「図工の指導は何をするのかイメージがわからない」などであった。自分の苦手意識、指導のイメージの少なさが指導に対する不安に結びついていると推察される。

以上の分析と考察から、受講前の学生は「図画工作科が好き」という肯定的イメージをもっているものの、図画工作科への苦手意識が高く、図画工作科を指導することに対して多くの学生が苦手意識や不安感をもっていると考えられる。

表2 初等教科教育法（図画工作）授業概要

回数	主な授業内容
1	オリエンテーション
2	図工・美術教育のこれまでとこれから
3	子どもの造形発達
4	学習指導要領の理解（1）
5	学習指導要領の理解（2）
6	A表現（1）造形遊び
7	A表現（2）表したいものを絵や立体・工作に表す
8	B鑑賞
9	指導と評価
10・11	題材設定と学習指導案作成（グループワーク）
12～14	発表とディスカッション①～③
15	次期学習指導要領、まとめ

表3-1, 2, 3 図画工作，指導への意識

1 好き・嫌い				
とても好き	好き	どちらでもない	嫌い	とても嫌い
30	42	15	23	9
72 (60.5%)		5 (12.6%)	32 (26.9%)	

2 苦手意識がある・ない				
ない	あまりない	どちらでもない	少しある	ある
3	22	20	39	35
25 (21.0%)		20 (16.8%)	74 (62.2%)	

3 指導への気持ち				
とても楽しみ	楽しみ	どちらでもない	不安	とても不安
3	15	13	43	45
18 (15.1%)		13 (10.9%)	88 (73.9%)	

4. 結果と分析・考察

前述した学生の「図工観・指導観」が全 15 回の授業終了時にどのように変容したのかについて、以下に分析・考察する。

15 回目の授業終了時に実施した質問紙への記入から、学生の「図工観・指導観」の変容についての結果と分析を行う。第 1 節（4.1）では図画工作科のイメージ（図工観）」が変容したか、さらに、変容の内容について、第 2 節（4.2）では図画工作科を指導することへの気持ちについての回答の結果について、分析・考察する。

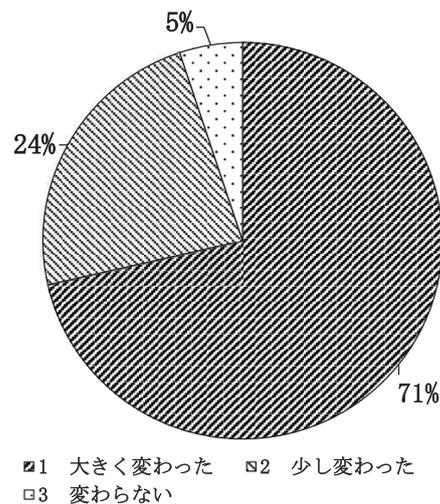
4.1 「図画工作科のイメージ（図工観）」の変容

「図画工作科のイメージ(図工観)が変わったか」を「1. 大きく変わった」、「2. 少し変わった」、「3. 変わらない」の三択から選択させ、「1. 大きく変わった」、「2. 少し変わった」と記入した回答者にはその内容を自由に記述させた。

その結果、「大きく変わった」と回答したのが 71%、「少し変わった」と回答したのが 24%であり、合わせると 95%が「図画工作科のイメージ（図工観）が変わった」と回答している（表 4.1.1, グラフ 1）。初等教科教育法（図画工作）の 15 回の受講を通して、95%の学生が、自分もっていた「図工観」が変わったと考えており、学生の「図工観」の変容が認められる。

表 4.1.1 「図工観」の変容

	回答数	%
1 大きく変わった	70	71%
2 少し変わった	23	24%
3 変わらない	5	5%
	98	100%



グラフ 1 「図工観」の変容の割合

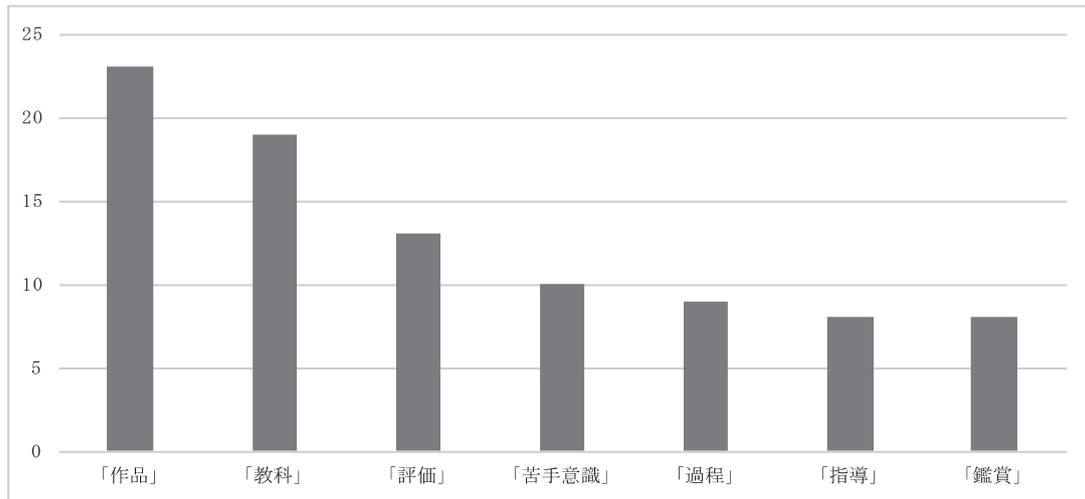
4.1.2 変容の内容

「大きく変わった」、「少し変わった」と回答した内容について自由記述したものをテキスト化し、記述内容から共通して記述されている語彙を抜き出した。その結果、「作品」、「教科」、「評価」、「苦手」、「過程」、「指導」、「鑑賞」が挙げられた（複数記述, 表 4.1.2, グラフ 2）。「大きく変わった」と回答した群を第 1 グループ、「少し変わった」と回答した群を第 2 グループとし、集計した。

以下に、それぞれの抽出語彙に関する具体的な記述内容を述べる。

表 4.1.2 頻出語の抽出

	第1グループ	第2グループ	計 (1 + 2)
「作品」	21	2	23
「教科」	13	6	19
「評価」	12	1	13
「苦手意識」	9	1	10
「過程」	7	2	9
「指導」	5	3	8
「鑑賞」	6	2	8



グラフ 2 頻出語の出現回数

① 「作品」に関する記述内容

もっとも多く抽出されたのは、「作品」に関する記述内容 (23 件) である。記述内容を具体的に示すと、「作品が全てではない」、「上手な作品を作ることが図工ではない」、「上手な絵を求めるのは間違い。子どもに自由に表現させることが大事」、「『図工=作品』ではない」、「評価が作品だけではない」などである。

記述に着目すると、「作品」が「全てではない」、「図工ではない」など、「作品」を第一に考えていた図画工作のイメージを否定する内容の記述となっている。

② 「教科」に関する記述内容

直接「教科」と記述している内容に「教科」としての意味や価値に関する記述を加えた回答が、19 件抽出された。記述内容を具体的に示すと、「図工は児童に必要な教科」、「図工の必要性和重要性」など教科としての重要性に関する記述、「目標や目的がある『教科』である」、「教師がしっかり考えた上で題材設定していると知り驚いた」など目標、題材設定などの「教科としての位置付け」に関する記述が抽出された。

図画工作科は「楽しい」ことがイメージとして優先されがちである。15 回の授業を通し、教科の目標や内容が決められている「教科」の一つであるという至極当然なことに改めて気がつくと推察される。

③ 「評価」に関する記述内容

「評価」に関する記述は 13 件抽出された。具体的な記述の特徴的なこととして、記述の前半に「作品からだけで評価をするもの」、「絵や作品が上手な子が高い評価」、「『作品の出来栄を評価する』もの」思っていたが『作品第一』ではない、「過程が大事」、「そうではない」等と否定的な内容を記述していることである。

また、「作品」の表記ともに記述されているものが多く、「作品を評価するもの」という図画工作科における評価観があり、その評価観が「作品だけで評価するのではない」と変容したと推察される。

④「苦手意識」に関する記述内容

「苦手意識」に関する記述は10件抽出された。記述内容を具体的に示すと、「苦手意識が楽しみに変わった」、図工が苦手でも指導ができる」、「図画工作は苦手だから指導ができないと思っていた」、「苦手でも大丈夫」などであり、授業を受ける前の図画工作科への苦手意識について記述している。苦手意識をもっていたが図画工作の指導に対しての不安感が低下した、期待感をもつようになったなど肯定的に変容したと推察される。

⑤「過程」に関する記述内容

「過程」に関する記述は9件抽出された。記述内容の特徴として、記述前半に「作品が大事だと思っていたが」と「作品主義」に関する記述をし、記述後半でそれを否定する内容である「その過程が大事」、「評価も過程が大事」、「子どもの思いとか過程が大事」、「一つ一つの過程に意味があった」等が記述されている。「作品主義」の図工観から、完成に至るまでの造形の過程が重要であることに対する気付きが認められる。さらに、「作品で評価する」という評価観から「過程を評価する」ことへ変容した内容が確認される。

⑥「指導」に関する記述内容

「指導」に関する記述は8件抽出された。記述内容を具体的に示すと、「指導法や教えるべきことがある」、「教師がしっかり考えた上で題材設定していると知り驚いた」、「しっかりとした指導法がある」、「指導一つで大きく変わる」などである。この記述内容は、図画工作は「作品（絵）をつくる（描く）」だけであり、指導法について意識を向けることがこれまでなかったことを意味する。前述した「教科」に関する記述（4.1.2）の分析と関連付ければ、それまで「教科」としての位置付けを意識していなかったため、指導法があること、題材開発や設定、目標設定、指導の手立てなど教科学習の指導に必須である教員の「指導」に関するイメージが欠如していたことが推察される。

⑦「鑑賞」に関する記述内容

「鑑賞」に関する記述は8件抽出された。記述内容を具体的に示すと、「作品づくりが全てではなく、造形遊びや鑑賞活動があること」、「鑑賞活動の多様さ」、「表現と鑑賞との関連で成立するものである」、「表現と鑑賞が一体となっていること」、「鑑賞の範囲、対象がとても広い」などである。学習指導要領には「表現活動と鑑賞活動を通して」と明記されており、図画工作の内容領域は「A 表現」と「B 鑑賞」の二つの内容から構成されている。しかし、学生が受けた図画工作の学習体験には「B 鑑賞」の活動がほとんど取り入れられておらず、鑑賞活動として位置付けられたとしても互いの完成作品の「いいところや工夫したところを見つめましょう」とする活動のみであることが、鑑賞を扱った授業（第8回目）におけるディスカッションやコメントシートから推察される。学生は、「作品をつくる」だけではなく、鑑賞活動が図画工作の領域の一つであり、鑑賞の対象や活動は多様であることを授業の中から学んだことが推察される。

4.1.3 「図画工作科のイメージ（図工観）変容」の考察

ここまでの結果と分析・考察から、学生の「図工観」の変容を以下のように考察することができる。

第一に、初等教科教育法（図画工作）全15回を受講し、学生の95%が「図工観が変わった」と考えている。その変容の内容は、「図画工作は作品（絵）をつくる（描く）教科である」、「図画工作の評価は完成作品で行う」という「作品主義」と言われる図工観を否定したものになっている。「完成作品」が重要なのではなく、子ども一人ひとりの発想や造形活動の過程に学びの意味があり、「完成作品」を評価するのではなく、その過程を評価するものであることを理解した。

第二に、それまで、図画工作科の「教科」としての位置付けや意味についての認識が十分ではなかったが、学習指導要領に明記された図画工作科の目標に沿って題材設定や指導・評価が工夫されて実施される「教科」であることを理解した。それまで、「作品（絵）をつくら（描か）せればよい」、「自由にやらせればよい」と考えていたのが、題材ごとに目標や評価規準・指導の手立てなどを明確にすることが重要であり、題材開発や適切な指導・評価が教師の責務であると考えられるようになった。

第三に、「作品主義」の教科観から生まれる「指導観」は「つくら（描か）せるための指導」であったため、

図画工作科そのものや自らの技能に不安を感じていた学生は、図画工作科を指導することへの大きな不安もっていた。しかし、「図工観」が作品主義から変容したことにより、図画工作科の学習が楽しいものであり、「自らが苦手でも指導ができる」という自信が形成された。

ここまでの考察から、初等教科教育法（図画工作）の授業での「図工観・指導観」の変容を図ることが達成されたと評価することができる。一方で、変容の内容を問う項目に関する記述には、「作品」を中心とする「図工観」が変容したことが認められるが、具体的にどのような教科観であるのか、つまり、何を育成し、どのような力を子どもたちに培うのかについての具体的な記述は確認できなかった。このことは、「図画工作科は作品（絵）をつくら（描か）せる教科」ではないことを理解することはできたが、「違う」ことだけを理解し、到達すべき図画工作科の目標の理解が十分ではないことを意味する。図画工作科の学習活動の過程が重要であることは理解しつつ、そこで働かせている「資質・能力」を明確にイメージすることができていない学生の課題が明らかになった。

4.2 「図画工作科を指導することへの気持ち」

「図画工作科を指導することへの気持ち」を「1 楽しみ」、「2 どちらかという楽しみ」、「3 どちらでもない」、「4 少し不安」、「5 不安」から選択させた。その結果、「楽しみ」、「どちらかという楽しみ」を合わせた回答が51人（52%）、「少し不安」、「不安」を合わせた回答が39人（40%）であった（表4.2, グラフ3.1）。

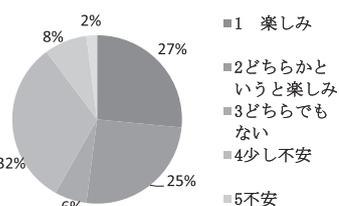
前述した「学生の図画工作、指導への意識の実態（第一回目授業）」での「図工を指導することへの意識」（3.2.2）の調査では、「楽しみ」、「どちらかという楽しみ」が15.1%、「少し不安」、「不安」が73.9%であった。図画工作の指導に対し期待感をもっている割合が15.1%から51%へ増加、不安感をもっている割合が73.9%から40%へと減少していることから、「図画工作科を指導することへの不安」感を低下させ、期待感を高めていると推察される。しかし、40%の学生が不安感をもっているということは学生の不安感を十分に解消したとは考えられない。

4.2.1 「図工観」の変容と「図画工作科を指導することへの気持ち」

「図工観」が「大きく変わった」の回答群（グループ1）と「少し変わった」の回答群（グループ2）のそれぞれの「図画工作科を指導することへの気持ち」への回答に着目する。「楽しみ」「どちらかという楽しみ」への回答が、第1グループでは59%であるのに対し、第2グループでは35%である。「少し不安」、「不安」への回答は、第1グループでは33%であるのに対し、第2グループでは65%である。

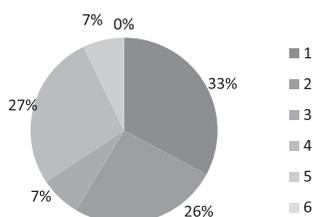
表4.2 「図画工作科を指導することへの気持ち」

	1 楽しみ	2どちらかという と楽しみ	3どちらでもない	4少し不安	5不安	無記入
回答数 (全体)	26	25	6	31	8	2
	27%	25%	6%	32%	8%	2%
1 大きく変わった	23	18	5	19	5	0
2 少し変わった	2	6	1	10	2	2
3 変わらない	0	1	0	2	1	1



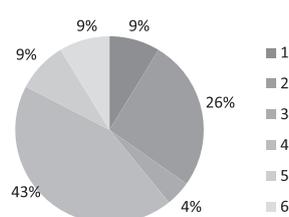
グラフ 3.1

「図画工作科を指導することへの気持ち」(全体)



グラフ 3.2

(第1グループ)



グラフ 3.3

(第2グループ)

安」への回答は、第1グループで34%であり、第2グループでは52%となっている。

このことから、「図工観が大きく変わった」と感じている第1グループが図画工作科の指導に対する不安感が少なく、「少し変わった」と感じている第2グループの不安感が高いということが推察される。

4.2.2 指導することへの気持ち（自由記述）

次に、指導することへの気持ちについて「何が楽しみ（不安）か」についての自由記述内容に着目する。自由記述内容を、指導することが「楽しみ」、「どちらかという楽しみ」、「どちらでもない」、「少し不安」、「不安」のそれぞれの回答別に分類した。その結果、「楽しみ」、「どちらかという楽しみ」と肯定的な気持ちをもっている回答者の記述には、「子どもの成長を近くで見られる」、「子どもの様子をたくさん見ていきたい」、「子どもたちの自由な発想、表現を見たい」、「児童たちの作品を見るのが楽しみ」、「子どもたちがどんな顔で作っているのかが楽しみ」など、子どもに寄り添った指導を連想させる記述内容が多い。

一方、「少し不安」、「不安」と不安感を感じている回答者の記述は、「自分にできるか」、「しっかりと子どもに向き合う授業ができるか」、「授業が作れるか」、「子どもたちを型にはめてしまいそう」などの内容であり、自分の指導力に関する不安を連想させる記述内容が多い。「図工観」の変容により、図画工作科の「指導観」は「上手な作品（絵）を作らせる」ものではなく、一人一人の子どもの造形活動や発想に寄り添ったものであることを理解していると推察される。したがって、この「不安感」は受講前の「作品主義」の「図工観」や自身の技能に関する自信の無さから形成される「不安感」とは内容を異にしていると考えられる。

4.2.3 「図画工作科を指導することへの気持ち」の考察

ここまでの結果と分析・考察から、学生の「図画工作科を指導することへの気持ち」の考察を以下のように整理する。

第一に、図画工作科を指導する不安感は減少したが、未だ半数近くの学生に不安感があることがわかる。

第二に、図画工作科を指導することへの期待感の内容は、子どもの発想や造形活動に立ち会うことや一緒に活動することなど、子どもに寄り添う指導のイメージがある。一方、不安感には自らの指導力に関する記述が多く、具体的な指導法のイメージが欠如していることが不安の要因となっている。

第三に、図画工作科を指導することへの不安の内容は、受講前の「作品」を中心とした「図工観」から形成される不安とは内容を異にしており、新たな「指導観」が形成されたことに伴って生じていると考えられる。

5. 結論

以上の分析・考察から、以下のような結論を導くことができる。

初等教科教育法（図画工作）全15回を受講した学生の95%が「図工観が変わった」と考えている。その変容の内容は、「図画工作は作品（絵）をつくる（描く）教科である」、「図画工作の評価は完成作品で行う」という「作品主義」と言われる図工観を否定し、「作品」が重要なのではなく、造形活動そのものに意味があり、その過程を評価するものである、と変容した。さらに、「作品（絵）をつくら（描か）せればよい」、「自由にやらせればよい」と考えていたが、教科としての位置付けが明確になった。

図画工作科を指導する意識について、不安感は減少したが、未だ半数近くの学生に不安感がある。「作品主義」の教科観から生まれる「指導観」については、「つくら（描か）せるための指導」であったため、図画工作そのものや自らの技能に不安を感じていた学生が、図画工作を指導することへの大きな不安をもっていた。しかし、「図工観」が作品主義から変容したことにより、図画工作が楽しいもの、苦手でも指導ができるという自信が形成されている。これは図画工作科を指導することへの期待感の内容は、子どもに寄り添う指導のイメージにつながるものである。

図画工作科を指導することへの不安の内容は、受講前の「作品」を中心とした「図工観」から形成される不安とは内容を異にしており、新たな「指導観」が形成されたことに伴って生じていると考えられる。初等教科教育法(図画工作)を受講したことにより、「作品」を中心とする「図工観」から脱却したことは認められるが、一方で、「図画工作で何を学ぶのか」、「どのような資質・能力を育成するのか」、さらに図画工作科の具体的な指導法についての理解が十分ではない実態が明らかになった。

6. 課題と今後の展望

初等教科教育法(図画工作)全15回を受講することで、それまでの作品主義的な「図工観・指導観」が変容したことは一定の評価ができるが、新たな課題が明らかになった。それは学生の「図工観・指導観」の転換を図ったが、結果として「作品第一」から何に転換させるのかを明確に示すことができなかったことである。「作品主義」から脱却し、向かう先は「子ども中心」であると考え。このことは、それぞれの教科で育成する「資質・能力」の明確化を求める新学習指導要領の趣旨と重なることである。単に「子ども一人ひとりを大切にする」だけでは、図画工作科における指導の意味を見失い、放任するだけの指導につながる危険がある。したがって、図画工作科で育成する「資質・能力」を明確にし、具体的な子どもの姿として学生に示すことが重要であると考え。

また、本研究では、実施した調査項目のうち、「図工観」の変容に有効であった授業取り組みとの関連について分析・考察が及ばなかった。毎回の授業でのグループディスカッションや授業終了後のコメントシート、教科書題材を活用した題材開発などの取り組みが、どのように学生の「図工観・指導観」に関連しているのかについて、今後の研究の発展課題としたい。

注

1. 小学生白書 web 版「小学生の生活・学習・グローバル意識に関する調査」(2016)によると、算数、体育に次いで図画工作となっている。

<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201510/chapter8/01.html> (参照 2017.10.31)

ベネッセによる「好きな教科」の調査(2015)では、家庭科について第2位である。

http://berd.benesse.jp/up_images/research/5kihonchousa_datebook2015_p27.pdf (参照 2017.10.31)

引用・参考文献

1. 図書

- ①三澤一実, 増田毅, 麻生圭子, 田中俊一, 宮島端子「所沢市における小学校教員を対象とする質問資料作法—図画工作・美術の所沢学力保証カリキュラム作成のアンケートから—」, 『教育学部紀要』, 文教大学教育学部, 第40集, 2003, pp.81-93
- ②降籬孝, 「教育力向上のための教員研修の要素と内容—『図画工作科』の実践的な教育力向上を目指して—」, 『山形大学教養・教育実践研究』, Vol.7, 2012, pp.45-54
- ③降籬孝, 「図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察—児童・生徒・大学生への実態調査結果から—」, 『山形大学紀要(教育科学)』, 第16巻第2号, 2015, pp.109-123
- ④隅敦, 「図画工作科に対する教科観の相違と教員養成の果たす役割—20歳代と50歳代の現職教員対象の聞き取り調査をもとに—」, 『美術教育学(美術科教育学会誌)』, 第36号, 2015, pp.223-238
- ⑤井ノ口和子, 「図画工作科における〈指導と評価〉の考察—図工観の転換に向けて—」, 『美術教育学研究』第49号, 大学美術教育学会, 2017, pp.57-64

- ⑥竹内博, 「美術（図画工作）科における授業研究の理念と方法—学習診断と授業評価」, 『美術教育学』第7号, 1985, pp.100-107
- ⑦栗田真司「小学校図画工作科の評価」, 『教育美術』2002年4月号, 教育美術振興会, 2002, p.32.
- ⑧花篤實, 「みがきの美学」, 『教育美術』第47巻, 1号, 1986, pp.54-57
- ⑨栗田真司「小学校図画工作科の評価」『教育美術』2002年4月号, 教育美術振興会, 2002, p.32
- ⑩永守基樹「美術教育における『作品』という問題群—『反・作品』から『脱・作品』へ」『美育文化』, vol.59, No.1, 美育文化協会, 2009, pp.13-19.

2. Web サイト・Web ページ

- ①小学生白書 web 版「小学生の生活・学習・グローバル意識に関する調査」
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201510/chapter8/01.html>（参照 2017.10.31）

